

## 例年の7割まで生産が回復した「真崎わかめ」

### 漁業施設のほとんどが失われた田老地区

岩手県の沿岸部、宮古市の市街地から北へ約15キロ。2005年に宮古市と合併した田老地区は、高さ10m、幅2.4キロという世界有数の大型堤防で知られる土地です。2011年3月11日、大きな揺れに驚いた田老町漁業協同組合(以下、田老町漁協)の業務部業務課課長、鳥居高博(とりい・たかひろ)さんは、地元で消防団を務めていたことから堤防の扉を閉めに駆けつけました。ですが、津波は堤防を乗り越えて街へ押し寄せ、1,400あまりあった世帯のうち1,000戸を超える家屋が損壊し、死者・行方不明者は166人(要確認)に及びました。

田老地区で地元の主要産業、漁業を支えるのが田老町漁協です。同漁協がつくる「真崎わかめ」は三陸を代表する製品で、いわて生協(当時は盛岡市民生協)とは、1977年から35年の取引の歴史があります。また、日本生協連とも、1980年から30年以上の取引の実績を持っています。

震災により、田老町漁協でも、わかめ加工場の工場長が亡くなるなど、組合員とその家族の犠牲者は87名に及びました。551世帯の組合員の家も約半数が損壊。963隻あった漁船のうち残ったのはわずか50隻足らず。また、7ヵ所あった漁港の堤防や岸壁が破壊されたことで、本部からすぐ近くのわかめの加工工場をはじめ、魚市場や製氷工場、コンブ、アワビの養殖施設など、多くの漁業生産施設を失いました。

「ゼロからというより、マイナスからの出発でした。当初のことは実はよく覚えていないんですよ。あまりに混乱していたということもありますし、思い出したくないということもあるでしょう」と田老町漁協の鳥居さんは、震災からの1年をこう振り返ります。

鳥居さんは、幸い家族は無事でしたが、震災直後から山火事の消火作業に追われました。被災した街からガソリンや重油が漏れ出し、そこから引火、さらに山にまで火が及んだのだ。他県から応援が駆けつけ、自衛隊の飛行機も空中消火にあたりました。

その間、携帯をはじめ通信手段は何もありませんでした。顔を合わせる事ができた人間を通して伝言してもらい、何とか漁協の職員たちが本部に集まる事ができたのが10日後のこと。堤防のすぐ脇にあった漁協の本部はかろうじて形をとどめていました。

全員の安否を探る手段はありません。集まった仲間で浸水した本部の後片付けから始めました。

「いたるところがれきですから、片付けるにしても捨てる場所がない。業者さんに何とか頼んだり、道路の端に積み上げたりでしたね」と鳥居さん。

その後、ゴールデンウィーク過ぎまでの約2ヵ月間は、本部や海岸線のがれき、海上の絡まった養殖施設の撤去作業などに明け暮れた。漁協の施設はほとんどが失われ、被害総額は90億円にのぼりました。

職員と漁業に携わる組合員の本格的な安否確認を始められたのは5月になってからです。本部の片付けが終わり、発電機を設置して電気が通じてパソコンを使えるようになりました。

## 養殖施設の復旧と加工施設の稼働

鳥居さんは、そんな中でも、地元の漁業を復活させる手がかりを探っていました。

「今年のおかめの生産は間に合うだろうか。来年(2012年)春に収穫するためには……。まず、わかめの種つけから始めなけりません」と鳥居さんは説明します。

わかめの養殖は、潜水夫が採ってきたわかめの根から胞子を取り出し、それを紐に付着させて発芽させるところから始まります。まず、培養のための仮施設をつくらなければなりません、問題はその後です。

紐から発芽した小さな葉(幼葉(ようよう))のわかめは、次に海上の養殖施設へ移して本格的な育成を始める。だが、そのための621台の施設は全て失われていたのです。

わかめの葉が出た紐を、養殖施設——海面に沿って張った200mほどのロープ——に巻きつける作業が10月から始まります。それまでに施設を復旧させなければなりません。しかし、材料、業者もパンク状態でした。

何とか439台分の施設の建設のめどを立て、工事を始めることができたのが8月になってからのこと。施設は従来の7割まで回復させられそうですが、今度は、そこで働く“人”の問題が浮かび上がってきました。

「震災でわかめの生産を辞めてしまおうという人が多くいました。以前ならば沿岸近くに住み、収穫するとすぐに自分で仕立て(茎部分を切って選別)、再び収穫に出ることも簡単でしたが、仮設住宅に住むようになってそれも難しくなりました」と鳥居さん。

理由は人それぞれありましたが、震災の打撃の大きさからすれば無理もないことでした。田老町漁協の組合長、小林昭榮さんを筆頭に、鳥居さん、田老町漁協の職員による懸命の説得で、97名いたわかめの生産者のうち、67名が仕事を再開することになりました。人もちょうど施設と同じ7割の人数でした。

船も不足していました。個人所有の船はほとんどが失われ、67名分の船を集めようとするがいっこうに進みません。何とか46曹を手に入れ、漁協の提供する5曹も合わせて共同で作業を進めてもらうことにしました。懸命に作業を進めましたが、11月いっぱいでは終わるはずの巻きつけ作業は、12月半ばまでかかりました。

12月から1月にかけては間引き作業が始まります。ロープ上で育つわかめを適正な数まで減らして育成を助けます。懸命に確保した船を共同で使いながら、ロープをたくし上げて育ちすぎたわかめを切り取っていきます。真冬の作業は厳しいですが、わかめは確かに育っていました。

しかし、不安材料はまだ残っていました。次なる問題は、加工施設です。わかめは収穫後、ボイルして塩蔵し、その後、冷蔵保存します。生のままでは保存が効かないのです。だが、湾岸に2つあった加工工場もすっかり流され、その復旧を進めなければなりませんでしたが、工場の建設となると、物も人も不足していました。

津波で骨組みだけ残された漁市場を利用することにし、その壁を貼り替え、屋根を修復して、何とか使える状態にできたのが年が明けた2012年3月10日のことでした。ボイルする機械などの加工設備の製造も、メーカーが目一杯の状況で、何とか設置し加工できる

まで調整できたのが3月16日。わかめの収穫は3月14日から始まる予定でしたが、シケで伸び、3月16日が初日となり、加工設備もギリギリ収穫に間に合わせる事ができました。

初日に水揚げできた養殖わかめは4トン。徐々に増えて4月22日には45トンまで増えました。例年は1日に80トン、ピーク時には120トンにもなり、それに比べればまだまだでしたが、収穫は4月20日まで続けて全部で1,500トンの水揚げを目指します。例年の7割。震災から1年でここまで回復させたことに誰もが驚きました。

### 不安は尽きないが、新しい希望も

収穫にこぎつけた今もまだ不安は尽きないといいます。鳥居さんが次に心配するのは、わかめの生育状況です。

「早く巻きつけたものと遅く巻きつけたものとは1ヵ月半の違いがあり、生育にも差が生じます。足りない船をやりくりして使ったため、巻きつけ作業は例年よりも大幅に伸びた。また、そのため収穫時期も例年より1週間ほど遅らせたが、さらに伸ばす必要があるかもしれない。だが、育ち切ったわかめはその後、枯れるのは早く、どこで見切りをつけるのが難しいのです」と鳥居さんは話す。

加工でも機械はまだ本調子ではなく、実際、時々、止めて調整しなければならなりません。以前は改良を重ねて最適に調整していましたが、すっかり新しくなった今は、思いがけないトラブルの心配が常につきまといまいます。

だが、新しい希望もあります。養殖わかめの生産者の人数は93名から67名

に減りましたが、新しく加わった3人は20代、30代の若い世代でした。平均年齢が60歳近くになり、70代の生産者も少なくない中、若い世代の登場は、地元の漁業にとって明るい材料となりました。中には漁業の経験のない人もいますが、初めは漁協の職員として定置網の船に乗って仕事を覚えてもらい、その後、わかめの養殖に携わってもらいます。

さらに2012年度は、もうひとつわかめのボイル施設の新設を予定しています。生産能力は今の工場と合わせて1日に50トンほどになる予定です。

2012年3月24日、「田老町漁協 収穫祝う会」が漁協本部で開催されました。2011年10月に開かれた「田老業漁協の励ます会」に続く、いわて生協による2回目の催しです。いわて生協の理事長・飯塚明彦さんは、「待ちに待ったわかめの収穫と製品の出荷が始まりました。本当にうれしい。復興はまだまだですが、わかめの出荷が復興に向けての大きな第一歩。そこに至るには田老町漁協の皆様のたいへんなご苦勞があったと思います。心から敬意を表します」と挨拶をしました。



ワカメの選別作業を体験する  
いわて生協の組合員のお子さん。

田老町漁協の組合長・小林昭榮さんは、「生活も生産の基盤も全てが失われて茫然自失、本当に漁業を再開できるのだろうかと思ったこともあります。しかし、みなさんに支えられてやって来ました。いわて生協さんとの35年のおつきあいが田老町漁協の組合員の誇りです。みなさんの真心が希望となり、前へ進む力になっています。田老地区は過去にもいろいろな災害に遭いましたが、そのたびに立ち上がって来ました。今回も必ず復興を成し遂げたいと思います」と応えました。



2012年3月24日に開催された  
「田老町漁協 収穫祝う会」の参加者。

この日の大雪は、津波でいっさいが失われた田老の街を真っ白に覆い尽くしました。これから本格的な復興が始まります。地元経済を動かす原動力の漁業が動き始めています。